

少女と老兵士

小川未明

青空文庫

某幼稚園では、こんど陸軍病院へ傷痍軍人たちをおみまいにいくことになりましたので、このあいだから幼い生徒らは、歌のけいこや、バイオリンの練習に余念がなかつたのです。きょうも、「父よあなたは、強かつた」を、バイオリンを弾くものと、うたうものとで調子を合わせたのであります。

「よくできました。これでおしまいにしましょうね。あしたは、お国のために、負傷をなさつた、兵隊さんたちをおみまいにまいるのですよ。」と、女の先生がいました。門から流れ出る生徒らを、二人の若い保姆が、たがいに十五、六人ずつ引きつれて、いつものごとく、道を左右に、途中まで見送つたのであります。

「ああ、わたしくたびれたわ。先生、おんぶしてちょうだい。」と、白い帽子を被つた、一人の女の子が、お姉さんにでもねだるように、保姆さんに、いいました。

子供のわがままをきくことになれている、そして、できることはしてやっている彼女は、日の照り返す、道の上へかがんで、背中をまるくして、その子をおぶおうとしました。すると、かたわらから、

「先生、わたしもよ。」と、いつて、目のぼつちりした、同じ年ごろの女の子が、いつ

しよに飛びつきました。たとえ小さくても、二人の子供の力に押されて、若い保母は、危うく前のめりになろうとしました。

「いつしよに、おんぶできせんから、ひとりずつになさいね。」

二人が、手を放した間に保母は、立ち上がりました。

「赤ちゃんみたいに、おんぶなんかして、おかしいから、さあ、歩いていきましよう。」
先へいった、四、五人の子供たちは、先生のくるのを待っていました。そして、近くと両手へほかの子供がひとりずつすがり、もうけつしてだれにも先生を渡さないというふうにして、歩いていきました。

「とも子ちゃん、あすこに大きなキューピーさんがあつてよ。」

さつきの白い帽子を被った子が、ランドセルの中の筆入れを鳴らしながら、片側にある店の方に向かって走りました。

「ほんと。」

目のぼつちりした子が、その後を追ったのであります。

「大きなおめで、大きなおぼんぼんね。」

「とも子ちゃんのおめめみたいよ。」

「あら、私の目、こんなに大きくないわ。」

「あら、先生が見えなくなつたわ。」

二人は、店の前をはなれると、駈け出しました。ちようどそのとき、横合いから、演習にいつた兵隊さんたちが道をさえぎりました。砲兵隊とみえて、馬が、大砲や、いろいろのものを乗せた車を引いて、あとからも、あとからも、ガラガラとつづきました。兵隊さんの黄色な服は、いくところか、汗がにじみ出て黒くなっていました。けれど、くつ音をそろえてわき見もせず、顔を前に向けて進んでいました。

「通れなくて、困るわ。」

「しかたがないわ、兵隊さんですもの。」と、とも子ちゃんは、いいました。

ふと、とも子ちゃんは、頭を上げて、青い空をながめました。すると、なんだか急に悲しくなつたのです。

「兄さんは、どうしていらつしやるだろう?」

翌日の午後でありました。先生に引きつれられて、女の子の多い、幼稚園の生徒たちは、そろそろと町の中を歩いていました。病院への途中であります。バイオリ

ンを提げている子をのぞいて、ほかの子供たちは、なにかしら兵隊さんをなぐさめるためにあげようとするものを手に持つていました。白い服、青い服、白い帽子、水色の帽子、ようすはいろいろでありましたが、いずれも小さくてぴちぴちしていて、お人形行列の行列のように見られました。通り合わせるものは、だれでも、この無邪気な一人一人の顔をのぞき込むようにして、ほほえまぬものはなかったのです。やがて、ゴーストツプのところへ出ました。けれど、この虫のはうようなのろい行列は、進めも、止まれも、おかまいなしに歩くよりは、どうすることもできなかつたので、やはり、のろのろと歩いていました。右からも左からも、前からも後ろからも、きかかつた車は、みんな子供のために止まつてしまいました。

「兵隊さんと子供にかかつてはなあ。」と、ガソリンの損になるのも忘れて、運転手が、笑いながらいつていました。

白い雲の峰がくずれたころ、この列は、広々とした病院の門入って、小砂利の上へ軽やかにくつ音をたてたのであります。

いくつか病棟があつたが、この幼い子供たちの向かつたのは、いちばん後方にあつた、白い病舎でした。そうじのゆきとどいた、大きなへやの中には、幾列となく

ベッドが整しく並んでいました。かたわらの卓の上には、薬びんや、草花の鉢がのせてありました。そして、白い服を着た兵隊さんはベッドの上へ横になつてゐるもの、あるいは、腰をかけてゐるもの、また、すわつてゐるもの、また、松葉づえを抱えて立ち話をしているもの、ちようどアルファベットのビスケットのように、その形がいろいろでありました。毎日のように、個人となく、団体となく、みまう人が絶えないので、こうした行列が珍しくなかつたが、この暑いのに、よくきてくれたと、目を細くして、汗に額のぬれた子供たちを見ていたものもあります。そのうちに、子供らは、正面へずらりとお行儀よく並んで、兵隊さんの方を見て、バイオリンに合せてうたいはじめました。

父よあなたは強かつた

かぶとをこがす炎熱に

敵の屍とともにねて

泥水すすり草をかみ

終わると、兵隊さんたちは、手をパチパチとたたいてくれました。拍手はそのへやからばかりでなく、へやの外の方からも起こつたのです。それから、子供たちは、一人、

ひとり、兵隊さんのそばへいつて、自分の持つてきたもの、たとえば作文や、自由画や、またお人形などを真心こめて、おみまいにあげたのです。このとき、兵隊さんは、みんなのくれるものを受け取つてにこにこしていました。

とも子ちゃんは、へやの中を見まわしていました。自分は、どの人にもあげよう……もとより、自分の知る顔のあらうはずがないけれど、それでも、やさしそうな、話をしてくれる人にも思つたのです。

若い兵隊さんたちとくらべて、年とつた兵隊さんがあちらのすみの方に、さびしうにしてすわっていました。顔にはひげがのびて、片手を繻帯していました。たぶん激戦に、手をやられたのでしよう。とも子ちゃんは、その兵隊さんのところへいつて、自分が骨をおつて色紙で造つた、千羽づるとかめの子をあげました。

「ありがとうございます。」と、兵隊さんは、にっこりとして、会釈しました。

「おじさん、うちの兄さんを知らないでしよう。」

「あなたのお兄さんも、戦争にいつていられますか。」と、兵隊さんが、ききました。
「ええ、もう一年になるのよ。」

少女は、なにか考え出そうとするように、ぱつちりとした目をみはつて、窓の方を

見ました。

「それは、ご苦労さまですね。」

年老つた兵隊さんは、この子供の頭をなでてやりたい気がしましたが、やめました。

「また、いいものこしらえたら、おじさんに持ってきてあげてね。」

少女は、振り向いて、先生の立つていらつしやる方へ走っていききました。

病院の屋上へ出ると、清らかな流れのように、いつも涼しい風が吹いていまし

た。月がなく、星明かりでは、たがいの顔もよくわからなかったが、傷兵たちは、静

かにして、レコードに聞き入っていました。両眼を失って、ここまで上つてくるのに、

二人の看護婦の肩に助けられなければならぬ人もあつたが、その人もやがて腰をかけると、

じつとして、同じように聞き入っているものでありました。あちらの地平線をほど近い、

にぎやかな街の燈火が、ぼうと闇を染めているのを見て、兵士の中には、戦場を思

い出すものもあつたでしょう。ちようどレコードは、愛馬行進歌をうたいはじめたところ

です。

老兵士も、みんなといつしよに、この歌に耳を傾けていました。汲み尽くせない悲

しみが、胸の底から、新らしくこみ上げてくるのを覚ええました。同時に、心の目は、昼間

慰問いもんにきてくれた、幼稚園ようちえんの生徒せいとらの混じりけのない姿すがたをよみがえらせました。そして、あの目めのぼつちりした少女しょうじょの、

「おじさん、うちの兄にいさんを知らない？」と、いった言葉ことばまでが、いまだに、耳みみについているのを感じかんじたのです。

おそらく、あの子この兄あにも補充兵ほじゅうへいであろうと思おもうと、老兵士ろうへいしをして〇〇攻撃こうげきの際さいに、自分じぶんの見た一光景こうけいを思おもい出ださせるのでした。険阻けんそな敵てきの陣地じんちへ突撃とつげきに移うつる暫時しばらくまえ前のことことです。

「君きみたち、いらぬものは捨すて、ごく身軽みがるになつていくのだ。」

こう注意ちゅういしてやると、後方こうほうから、前線ぜんせんへ送おくられたばかりの、若い兵士わかいへいしの一人ひとりが、目め前で、背囊はいのうをおろして、その内うちを改あらためていました。そのとき、老兵士ろうへいしは、ふくらんだ背囊はいのうをみつめて、まごまごしている若い兵士わかいへいしに向むかつて、

「なにがそんなに入はいっているのか。」と、きいたのです。すると、その年若としわかの兵士へいしは、一つ、一つ出だして見みせて、

「これは、お守まもりです。出でるときに、みんながくださったのです。」

「これは、お薬くすりです。お母かあさんが、入いれてくださったのです。」

「これは、日の丸の旗に、たくさんの人の名が書いてあるのです。」

「これは、姉からの手紙です。みんな、大事なもののばかりです。」

そういつて、じつと老兵士の顔を見上げた、あの青年の澄んだ目には、これを身につけて自分は死んでいくという純情があらわれていました。

「いや、おれたちの体が弾丸になるのだ。みんな捨ててしまえ！」と、老兵士は、口まで出たが、無理に、だまつて、じつと若い兵士の顔を見返しました。その光つた瞳の中に、たとえ肉体は亡びても、けつして永久に死なない生命のあることが刹那に感じられたのであります。

いま、老兵士は、蓄音機の歌をきくためでなく、そのときのことを思い出して、深くうなだれていました。

「まもなくして、あの突撃が起こつたのだな。」

大きく開いた目、真っ赤な顔、火がだるまのようになって、敵陣目がけて、一塊となつて、突つ込んでいった友軍の姿が……。

「おじさんは、うちの兄さんを知らないでしょう。」

またしても、こういつて、自分を見上げた、少女のぱつちりとした目が浮かびまし

た。その目は、清らかなうちに、どこか悲しみに傷んだところがあつた。

「おお、あのときの青年の目と、さつきの少女の目と同じでなかったか。」と、老
兵士は、おどろきました。さらに、彼は、二人が、兄妹でないのかとさえ考えられ
るのでした。

それは、あまりにも空想的な考えようであつたでしょう。しかし、たとえ兄と妹でな
くても、その澄みきつたかがやく目の中に、相通ずるものを見ました。人間であつて、
人間以上のものを感じたのです。

「いつたい、それはなんであろうか。」と、彼は、考えました。そして、ついに、悟りま
した。生命というものは、はかないが、眞実は、なんらかの形で永久に残るとい
うことでした。

彼は、しだいにふけていく、初秋の夜の空を仰ぎました。金色に、緑色に、
うすく紅に、無数の星が輝いています。おそらく、どの一つにも烈々として、炎が燃え
上がっているにちがいない。しばらくすると、それが、みんな人間の目になつて見える
のでした。寂然として、ものこそいわないが、永遠に眞実と正義とを求めている。
その光は、胸の底に深く浸み入つて、魂をかきむしるのでした。

「傷きずがなおつたら、早はやく戦せん線せんへ帰かえろう。」

彼は、ほっとして、はじめで多おほくの傷しょう兵へいたちといっしよに、レコードに耳みみを傾かたむけよ
うとしたが、いつのまにか心こころは、また、あらぬほうへと飛とんでいました。

「人間にんげんは死ぬしと、あの星ほしになるつてな。」

すでに、去きよ年ねんのいまごろ、塹壕ざんごうの中なかで、異郷いきようの空そらを見みながらいった、戦友せんゆうの言こ
葉とばが、思おもい出だされたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「中央公論」

1939（昭和14）年8月

※表題は底本では、「少女《しょうじょ》と老兵士《ろうへいし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少女と老兵士

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>